

教養プロジェクトコメントカッコカリ

北大経済学部三年
井上敦司

(8)建築物

- (8-1)原爆ドーム：日本
- (8-2)大和ミュージアム：日本
- (8-3)ウィンザー城：イギリス
- (8-4)ウェストミンスター宮殿：イギリス
- (8-5)青函トンネル：日本
- (8-6)クライスラービル：アメリカ
- (8-7)ペトロナスツインタワー：マレーシア
- (8-8)ヴェルサイユ宮殿：フランス
- (8-9)エルミタージュ美術館：ロシア
- (8-10)パナマ運河：パナマ

建築物に関しては、自分が実際に見てもいない場所ばかりで並べるのもどうかと思ったので、(8-1)から(8-5)までを、私が行ったことのある場所、(8-6)から(8-10)を今後行ってみたい場所から選んだ。特に、私は広島県の出身であるため、原爆ドームや大和ミュージアムには幾度となく訪れているが、戦争の恐ろしさを体感すると共に戦争や軍隊のために科学技術が発展し、応用されてきた皮肉な歴史に思いを馳せることが出来る場所だ。

このテーマは「建築物」なのだが、強引な解釈を加え、建築物というよりは、建造物と呼ぶ方が相応しい建築物もかなり含まれている。建築物は芸術性も重要であるが、科学技術の発展や、建築技術の発展により建造された建物にも、教養としての意味はありと私は考えている。

ウィンザー城やウェストミンスター宮殿は高校の修学旅行で行ったのだが、イギリスの歴史を感じる事が出来る様なものが見られ、とても興味深い。

余談であるが、私が北海道に来た当初、時計台にはビッグベン、小樽運河にはスエズ運河並のサイズをイメージしていたので、実際に行って拍子抜けしてしまったという思いがある。

(10)ライトノベル

- (10-1)バッカーノ！シリーズ

<http://dengekibunko.dengeki.com/newreleases/978-4-8402-2278-5/>

(10-2)断章のグリムシリーズ

<http://dengekibunko.dengeki.com/newreleases/978-4-8402-3388-0/>

(10-3)ヘヴィーオブジェクトシリーズ

<http://dengekibunko.dengeki.com/newreleases/978-4-04-868069-1/>

(10-4)煉獄姫シリーズ

<http://dengekibunko.dengeki.com/newreleases/978-4-04-868772-0/>

(10-5)灼眼のシャナシリーズ

<http://dengekibunko.dengeki.com/newreleases/978-4-8402-2218-1/>

(10-6)涼宮ハルヒシリーズ

<http://sneakerbunko.jp/series/haruhi/>

(10-7)銀盤カレイドスコープシリーズ

<http://www.amazon.co.jp/%E9%8A%80%E7%9B%A4%E3%82%AB%E3%83%AC%E3%82%A4%E3%83%89%E3%82%B9%E3%82%B3%E3%83%BC%E3%83%97%E3%80%88vol-1%E3%80%89%E3%82%B7%E3%83%A7%E3%83%BC%E3%83%88%E3%83%BB%E3%83%97%E3%83%AD%E3%82%B0%E3%83%A9%E3%83%A0-Road-dream-%E9%9B%86%E8%8B%B1%E7%A4%BE%E3%82%B9%E3%83%BC%E3%83%91%E3%83%BC%E3%83%80%E3%83%83%E3%82%B7%E3%83%A5%E6%96%87%E5%BA%AB-%E6%B5%B7%E5%8E%9F/dp/4086301326>

(10-8)甘城ブリリアントパークシリーズ

http://www.fujimishobo.co.jp/bk_detail.php?pcd=301312001250

(10-9)Fate/Zero シリーズ

<http://sai-zen-sen.jp/sa/fate-zero/>

(10-10)下ネタという概念が存在しない退屈なセカイシリーズ

<http://gagagabunko.jp/shimoseka/>

「ライトノベルなぞ文学ではない」と、頭の固いお年寄りはいうかもしれない。しかし、いつの時代も、最先端に行く物は、既成観念に囚われた石頭たちには理解できないものだ。数十年後になって、優れたライトノベルが文学として正当に評価されるような時代が来ることを祈り、私はライトノベルを教養プロジェクトで取り上げることにした。

そもそもライトノベルとは定義が不明瞭な小説のジャンルである。アニメ調の挿絵が挿入されている、特定のレーベルから出版されているなどの説は存在する。

一般的な小説と比較したライトノベルの魅力は、手軽に読めること、魅力的なキャラクター、美しい挿絵にあると思っている。

私は高校生の頃にライトノベルの魅力にとり憑かれ、一日に複数巻まとめて読むほどハマっていたこともあった。しかし、大学生になってから考えると、なんであんなのにハマ

っていたんだろうかと思うような話も少なくない。「別のラノベでも見たような設定」「俺TUEE系主人公」「キャラは魅力的だがそれだけ」などの原因がある。

そこで、私が読んだ数多のライトノベルの中から、上述の要素を排除し、優れたストーリー性やメッセージ性を持ち、かつオリジナリティの強い作品をここで紹介する。

ここに挙げた中で私が特に好きなのは、「断章のグリム」シリーズと、「下ネタという概念の存在しない退屈なセカイ」シリーズである。「断章のグリム」シリーズは、グリム童話などの有名な童話をモチーフにした様々な事件を、童話をモチーフにした能力を持つ主人公たちが対決する話である。モチーフとなる童話に対し、興味深い解釈がなされており、推理小説を読むイメージで楽しめる作品である。

「下ネタという概念の存在しない退屈なセカイ」シリーズは、性的な表現が悪とされるようになり、国民から性知識が奪われディストピア化した近未来の日本において、国民を啓蒙し圧政に対抗するためのレジスタンス活動を行う主人公たちの闘争の物語である。「下ネタテロ」という一見バカげた行動が、民衆を啓蒙し圧政に対抗するための行動だと捉えれば、意味合いが全く違って見えるのがとても興味深い作品である。